令和８年度

全国学力・学習状況調査結果及び分析

佐倉市教育センター

目　次

Ⅰ　令和８年度全国学力・学習状況調査について ・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　教科の分析

- ○　小学校 国語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
- ○　小学校 算数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
- ○　中学校 国語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
- ○　中学校 数学 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
- ○　中学校 英語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

Ⅲ　児童生徒質問紙の分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7,8

Ⅳ　学校質問紙の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

Ⅰ　令和８年度 全国学力・学習状況調査について

１　調査実施日

【国語・算数】令和８年４月２３日（木）（一部学校は別日実施）
【英　　語】令和８年４月２４日（金）～ ５月８日（金）
【質 問 調 査】令和８年４月２１日（火）～ ５月１日（金）

２　調査目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

（「令和８年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領」より）

３　結果公表の趣旨

本調査において、市内小中学校全体の結果を公表することは、佐倉市教育委員会が保護者や地域住民の方々に対し、説明責任を果たすことになる。また、分析した調査結果は、各学校における教育活動の改善に生かすとともに、佐倉市教育委員会の施策に資するために活用する。

ただし、本調査により測定できるのは学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎない。以上のことを考慮し、学校では、教育活動の取組状況と本調査結果の分析を踏まえた指導改善策を併せて示すことで、児童生徒の学力向上に資することが望ましい。

４　調査対象

学校種	実施校数	当日実施した児童生徒数		
		国語	算数・数学	英語
小学校	２３校	１，１７５人	１，１７３人	
中学校	１１校	１，０８８人	１，０８６人	１，０７７人

５　結果一覧

	小学校国語 平均正答率	小学校算数 平均正答率	中学校国語 平均正答率	中学校数学 平均正答率	中学校理科 ＩＲＴスコア
佐倉市	５９	５５	６５	５８	５０３
千葉県	６１	５６	６４	５７	４９９
全国	６０．９	５６．４	６３．９	５７．０	４９９

Ⅱ　教科の分析　【小学校国語】

1　小学校国語の平均正答率

問題数　１３問	佐倉市（公立）	５９％
	千葉県（公立）	６１％
	全　国（公立）	６０．９％

2　小学校国語に関する調査の結果の概要

〇「話すこと・聞くこと」の領域の正答率が高かった。
〇選択式の問題形式は、他の問題形式に比べて比較的高い正答率であった。
▲「情報の扱い方に関する事項」や「書くこと」、「読むこと」の領域が相対的に正答率が低かった。
▲選択式と比較すると、記述式、短答式の問題形式において正答率が低い傾向が見られた。

3　小学校国語に関する調査の結果に見られる特徴と現状分析

〇資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫することができている。
〇筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考えることができている。
〇話や文章の種類とその特徴について理解することができている。
▲複数の情報を関連付け、考えとそれを支える理由や事例との関係を捉えることに課題がある。
▲引用した内容と自分の考えを関連付けて、自分の考えが伝わるように書き方を工夫することに課題がある。
▲情報相互の関係を理解し、図などを活用して語句同士の関係を適切に表現することに課題がある。

4　小学校国語の改善策

☆自分の考えを明確にした上で、それを支える理由や事例を複数考え、適切なものを選んで説明する活動を充実させることが大切である。
☆引用する目的を明確にし、引用した内容と自分の考えとの関係を意識して書くことができるよう指導することが大切である。適切な引用を基に、自分の考えをまとめる活動が、根拠を明確にして表現する力の育成につながる。
☆情報と情報との関係を関連付けて理解できるよう指導することが重要である。そのために、目的に応じて複数の情報を図示しながら整理する活動を充実させることが大切である。

Ⅱ　教科の分析　　【小学校算数】

１　小学校算数の平均正答率

問題数　１６問	佐倉市（公立）	５５％
	千葉県（公立）	５６％
	全　国（公立）	５６．４％

２　小学校算数に関する調査の結果の概要

○「測定」の領域の正答率が高かった。
○短答式の問題形式は、他の問題形式に比べて比較的高い正答率であった。
▲「数と計算」、「変化と関係」、「データの活用」の領域が相対的に正答率が低かった。
▲短答式と比較すると、記述式、選択式の問題形式において正答率が低い傾向が見られた。

３　小学校算数に関する調査の結果に見られる特徴と現状分析

○立方体の体積の計算による求め方について理解できている。
○小数が整数と同じ十進位取り記数法の仕組みで表されていることを理解できている。
○示された情報を基に、数量の関係に着目して、条件に合う時間を求めることができている。
▲単位量当たりの大きさを求める除法の式の意味を理解し、その商から混み具合いについて判断することに課題がある。
▲基準量、比較量、割合の関係の理解に課題がある。
▲二次元の表から、条件に合う数を読み取ることに課題がある。

４　小学校算数の改善策

☆二つの数量を比較する活動を通して、異種の二つの量の割合として数量の関係を捉えさせることが重要である。その際、図や数直線を活用し、量をそろえて比較する必要性や単位量当たりの大きさの意味を理解できるよう指導することが大切である。
☆基準量と比較量との関係を図で表しながら考える活動を継続的に取り入れ、割合を基準量を１としたときの大きさとして捉えさせることが重要である。
☆データを二つの観点から分類整理する活動を通して、二次元の表の構成や見方について理解できるよう指導することが大切である。また、表の行や列を順序よく追いながら必要な数値を読み取ったり、合計の意味を捉えさせることが重要である。

Ⅱ　教科の分析　　【中学校国語】

１　中学校国語の平均正答率

問題数　１５問	佐倉市（公立）	６５％
	千葉県（公立）	６４％
	全　国（公立）	６３．９％

２　中学校国語に関する調査の結果の概要

〇「情報の扱い方に関する事項」、「話すこと・聞くこと」の領域の正答率が高かった。
〇選択式と短答式の問題形式は、他の問題形式に比べて比較的高い正答率であった。
▲「読むこと」の領域が相対的に正答率が低かった。
▲他の問題形式と比較すると、記述式の問題形式において正答率が低い傾向が見られた。

３　中学校国語に関する調査の結果に見られる特徴と現状分析

〇単語の活用、助動詞の働きについて理解できている。
〇情報と情報との関係の様々な表し方を理解し、使うことができている。
〇表現の効果を考えて描写することができている。
▲語句の辞書的な意味を踏まえ、文脈上の意味を捉えることに課題がある。
▲文章を読んで得た情報や考えを踏まえながら、自分の考えを形成することに課題がある。

４　中学校国語の改善策

☆語句の意味や役割、語句同士の関係に着目して読む活動を継続的に取り入れることで、文脈に即して語句の意味を適切に捉える力の育成につながる。
☆文章の内容をどのように把握し解釈したのかを基に、自分の考えを形成できるよう指導することが重要である。そのために、文章を読んで理解したことを振り返りながら考えを深める活動を充実させることが大切である。

Ⅱ　教科の分析　　【中学校数学】

１　中学校数学の平均正答率

問題数　１６問	佐倉市（公立）	５８％
	千葉県（公立）	５７％
	全　国（公立）	５７．０％

２　中学校数学に関する調査の結果の概要

○「数と式」、「図形」、「データの活用」の領域の正答率が高かった。
○選択式、短答式の問題形式は、他の問題形式に比べて比較的高い正答率であった。
▲「関数」の領域が相対的に正答率が低かった。
▲他の問題形式と比較すると、記述式の問題形式において正答率が低い傾向が見られた。

３　中学校数学に関する調査の結果に見られる特徴と現状分析

○具体的な場面において、正の数と負の数を用いて変化や状況を表すことができている。
○与えられた表やグラフから、必要な情報を適切に読み取ることができている。
○箱ひげ図と四分位数の対応について理解できている。
▲数学的に表現したことを事象に即して解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することに課題がある。
▲具体的な事象を基に、証明する事柄の仮定を見いだすことに課題がある。
▲データの傾向を的確に捉え、判断の理由を度数分布多角形の特徴を基に説明することに課題がある。

４　中学校数学の改善策

☆表、式、グラフなどの数学的な表現に着目し、それらを問題解決にどのように用いたかを説明する活動を充実させることが重要である。また、数量の関係を根拠をもって考察し、数学的な表現を用いて説明できるよう指導することが大切である。
☆与えられた条件や図から仮定と結論を明確に捉え、数学的に表現できるよう指導することが大切である。また、仮定と結論の関係を整理しながら証明の見通しをもたせることが、効果的な指導につながる。
☆データの分布の傾向を捉えながら、累積度数や累積相対度数の意味を理解できるよう指導することが大切である。人数や割合を累積度数から読み取り考察する活動が、統計的にデータを分析する力を高める指導につながる。

Ⅱ　教科の分析　　【中学校英語】

１　中学校英語のＩＲＴスコア

問題数　２６＋α問	佐倉市（公立）	５０１
	千葉県（公立）	４９８
	全　国（公立）	４９９

２　中学校英語に関する調査の結果の概要

○「聞くこと」、「読むこと」の領域の正答率が高かった。
○選択式、短答式の問題形式は、他の問題形式に比べて比較的高い正答率であった。
▲「書くこと」の領域相対的に正答率が低かった。
▲他の問題形式と比較すると、記述式の問題形式において正答率が低い傾向が見られた。

３　中学校英語に関する調査の結果に見られる特徴と現状分析

○社会的な話題について、話を聞き、要点を捉えることができている。
○日常的な話題について、目的に応じて、必要な情報を読み取ったり、聞き取ったりすることができている。
○日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある内容を話すことができる。
▲社会的な話題について、短い文章を読み、要点を捉え、考えとその理由を書くことに課題がある。
▲日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、まとまりのある文章を書くことに課題がある。
▲音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどの知識を、話すことによる実際のコミュニケーションにおいて活用することに課題がある。

４　中学校英語の改善策

☆文章全体の構成を基に、書き手が最も伝えたいことを捉えることができるよう指導することが大切である。そのために、主張と理由や具体例との関係を読み取り、要点を整理する活動が効果的な指導につながる。
☆事実や自分の考えを整理し、まとまりのある文章を書くことができるよう指導することが大切である。そのために、文と文との関係に着目して文章全体の構成を捉えさせることが重要である。
☆生徒にとって身近で話しやすいテーマを取り上げ、自分の考えや気持ちを伝えたり、相手に関連する質問をしたりする活動を継続的に行うことで、「話すこと［やり取り］」の力の育成につながる。

Ⅲ　児童生徒質問紙の分析

※ ○：良好なもの　▲：課題が見られるもの　◎考察

基本的生活習と学習習慣

○小中学生ともに県、全国平均と比べて肯定的回答が高い質問
「人の役に立つ人間になりたいと思う」
○小学生で好きな教科を問う設問において、全国平均よりも高かったのは、
「英語（＋４．０）」である。
○中学生で好きな教科を問う設問では、全ての教科が全国平均よりも高い。
「国語（＋３．２）」、「数学（＋４．６）」、「英語（＋２．０）」
○小学生は、「将来の夢や目標を持っている」の回答が県、全国平均と比べて高い。
○中学生は、「自分と違う意見について考えるのは楽しい」の回答が県、全国平均と比べて高い。
○中学生は、県や全国と比較して学校以外の学習時間が長い傾向にある。
○小中学生ともに、県や全国と比較して学校以外の読書時間が長い傾向にある。
▲小学生は、「分からないことやくわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができる」の回答が県、全国平均と比べて低い。
◎小中学生ともに「自分と違う意見について考えるのは楽しい」「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている」の質問において、肯定的な回答をした児童生徒は、各教科の平均正答率が高い傾向が見られた。
◎小中学生ともに「普段、１日当たりどれくらいの時間、テレビゲーム（スマートフォン等を含む）をするか」において、使用時間が少なければ少ないほど、各教科の平均点が高い傾向が見られた。
◎小中学生ともに「朝食を毎日食べている」「毎日同じくらいの時間に起きている」「自分にはよいところがある」という質問に対して、肯定的な回答をした児童は各教科の平均正答率が高い傾向が見られた。
◎中学生において「学校に行くのは楽しい」「新聞を読んでいる」という質問に対して、肯定的な回答をした生徒は各教科の平均正答率が高い傾向が見られた。

ＩＣＴを活用した学習状況

○小学生は、学習の中でタブレットなどのＩＣＴ機器を活用することに関して、有用感を感じている児童生徒は、県や全国と比較して高い傾向にあることがわかった。

▲小学校、中学校ともに、授業におけるＩＣＴ機器の使用頻度は、県、全国の平均を大きく下回った。

▲中学生は、「PC・タブレットなどの ICT 機器を使って学校での活動でプレゼンテーション（発表のスライド）を作成することができる」の回答が県、全国平均と比べて低い。

◎タブレットなどのＩＣＴ機器の使用頻度は、少ないことがわかった。小学生、中学生ともに、ほぼ毎日と使用頻度の回答をした児童生徒は、どの教科においても平均正答率が高い傾向がある。一方で、月１回未満の使用頻度の回答をした児童生徒は、全ての教科において平均正答率が低いことがわかった。ＩＣＴ機器は、児童生徒の実態や学習内容に応じて効果的に活用することが重要である。そのため、学習のねらいに応じた活用場面を計画的に設定することが、効果的な指導につながる。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組

○小中学生ともに「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」の回答が県、全国平均と比べて高い。

○小中学生ともに「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」の回答が県、全国平均と比べて高い。

○中学校では、算数の授業で、「問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えている」と回答した生徒の割合は、県、全国の平均に比べて高かった。

○中学校では、「授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる」と回答した児童の割合は、県、全国の平均に比べて高かった。

▲小中学生ともに「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していた」と回答した割合は６０％前後と低かった。

◎小中学生ともに「課題の解決に向けて、自分で考え自分から取り組んでいる」と回答した児童生徒の各教科の平均正答率が高いことがわかった。児童生徒の興味関心を引き出し、探求する力を育む授業を行うことが大切である。

◎自分の考えが相手に伝わるよう、資料や話の組立てを工夫して表現できるよう指導することが重要である。そのため、小中学校を通して、自分の考えを整理し、根拠を基に伝える活動を継続的に取り入れることが効果的な指導につながる。

Ⅳ　学校質問紙の分析

※ ○：良好なもの　▲：課題が見られるもの　◎：考察

学校運営に関する状況　/　教員の資質向上に関する状況

○小学校、中学校ともに、児童の地域の現状に関する調査や各種データなどに基づき、教育課程を編成し、評価して改善を図る一連の PDCA サイクルを確立している割合が県や全国に比べて高かった。

○小学校、中学校ともに、教職員が困っている時、管理職と教職員との間で随時相談できるなど組織的に対応する体制を構築している割合が県や全国に比べて高かった。

◎小中学校において、各種データを活用した教育課程の改善が組織的に進められているとともに、教職員を支える相談・支援体制も整備されており、学校運営が組織的に行われていることがわかった。

ＩＣＴを活用した学習状況

○中学校において、教員がコンピュータなどのＩＣＴ機器の使い方を学ぶために必要な研修機会が県や全国に比べると多くいることがわかった。

○小学校、中学校ともにＰＣ、タブレットなどのＩＣＴ機器を外国人児童、生徒に対する学習活動の支援で使用している割合が高いことがわかった。

▲ＩＣＴ機器を活用した学習状況は、県や全国に比べると使用頻度が少ないことが分かった。

◎中学校では、教員が ICT 機器の活用方法を学ぶための研修機会が、県や全国と比べて多く確保されていることがわかった。また、小学校、中学校ともに、外国人児童生徒に対する学習活動の支援において ICT 機器を積極的に活用していることがうかがえる。一方で、授業における ICT 機器の活用頻度は県や全国に比べて低い状況にある。研修で培った知識や技能を日常の授業実践に生かし、児童生徒の学びを深めるための効果的な ICT 活用を一層推進していく必要がある。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況

○小学校、中学校ともに、「友達や周りの人の考えを大切にしてお互いに協力しながら課題解決に取り組めている」と回答した割合が県、全国と比べて高かった。

▲小学校では、学習指導において、児童一人一人に応じて、学習課題や活動を工夫したと回答した割合が県、全国と比べて低かった。

◎小学校、中学校全般において、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組については、概ね肯定的な回答が見られた。一方小学校では、児童一人一人に応じた学習課題や活動の工夫及び、習得・活用・探究の学習過程を見通した指導方法の改善や工夫を行ったと回答した割合が県や全国と比べて低かった。児童の実態に応じた学習活動の工夫や、学習過程を意識した授業改善を充実させ、主体的に学び続ける力を育成することが重要である。

家庭学習

○中学校では、家庭学習の方法を具体的に指導するとともに、生徒が自ら学習内容や学び方を決めて取り組む活動を行ったと回答した割合が、県や全国と比べて高かった。

▲小学校では、「家庭学習について、児童生徒が自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、工夫して取り組めるような活動をよく行った」と回答した割合が県や全国に比べて低かった。

◎佐倉市では、佐倉型カリキュラム・マネジメントのもと、学校と家庭の双方で学習習慣の定着を図りながら児童生徒の自主的な学習態度の育成に努めている。小学校段階から家庭学習の内容や方法を自ら考える機会を充実させ、中学校での主体的な学習につなげていくことが重要である。